

台湾仏教の現状

武 田 龍

第一章 台湾仏教

一 現状を把握するために

同朋大学佛教文化研究所アジア仏教研究会は、浄土教の理解を深めることを目的として、月一回程度で研究会を開いている。基本作業として魏訳『無量寿経』の読解をおこないつつ、アジア諸地域の仏教の存在形態に関心を持ち、情報を収集してきた。

台湾の仏教が非常に活発である、と伝え聞くことが多い。意外なことだが、仏教のこの活況は戦後のことである。仏教だけでなく、戦後になって大陸から活動の場を移した各種さまざまな宗教が活発な活動を行っており、今やその状況は「百花斉放」と評されるほどである。これほど多様にして多数の宗教団体が一時期に來台して布教活動を行ったことは他

に類例の無いことで、現在の台湾で起っていることは人類史上稀なことと言えるのではないか。そうであれば台湾民衆は未曾有の経験をしていることになるだろう。

近年、僅か四十年ほどの間に、カリスマ指導者の率いる仏教団体が、これまで以上に世俗社会の現実に即した形で仏教を説き、多くの人々の関心を仏教に引きつけることに成功した。

その成功の要因を考える時、観察のまなざしは政治や経済や社会体制という外的要因の方に向かいがちである。政治体制や経済の仕組み、国際社会における台湾の地位の変化と民心との相関、経済成長と社会矛盾、自由主義と共産主義との葛藤、儒教の因習からの解放、仏教団体と政権との関係、というような構図の中で決定的な要因を求めようとすることが多い。台湾における仏教の受容は、それらとどのように関連するもの

であろうか。しかし、いくら議論を重ねても、これらの枠組みの中では問題の核心に迫ることはできないように思われる。今の台湾に起こっていることは、とてもそれだけで説明できるものではない。宗教離れが言われる日本の伝統教団と対比して、その高揚ぶりには羨望の念を禁じ得ない。

辛亥革命により清朝を倒して成立した中華民国こそ中国であるという国民党の主張に反して、一九六〇年代後半から大陸の中華人民共和国が諸国と国交を締結するようになった。一九七一年には国連が中国を代表する政府として中華人民共和国政府を認めたため、中華民国は国連を脱退する。一九七二年に中華人民共和国が国連に加盟すると、国際社会は「二つの中国」という原則により、中華民国との外交関係を断絶した。

こうして、中国を代表する政権として中華人民共和国が認知されたことにより、中華民国（台湾）は国際社会から退場し、孤立したかに見えた。

その後の中華民国（台湾）の国内には、台湾を「今も中国の一部」ととらえる立場（統一派）と、「もと中国（であり今はそうではない）」ととらえる立場（独立派）とが混在し拮抗するという不安定な状態が続いた。しかし経済が順調に成長したことにより、民心は安定し、一九八七年には戒厳令が解除されるに至る。台湾（中華民国）の国際的地位が高まるにつれ、「自分たちは中国に住む中国人である」という自覚は、国際社会では空回りするようになる。「中国の中国人」と扱われない民衆の中に徐々に「台湾」を核にしたアイデンティティが育ち始める。本省

人と外省人との対立の時期を越えて、自分たちのことを「台湾に住む中国人」と認識するのか、「台湾に住む台湾人」と認識するのか、「中国人でありつつ台湾人」と認識するのか、悩ましいジレンマが生まれた。

海外に進出した人々の形成する華人ネットワークが、台湾を世界経済の中に位置付けて再び国際社会に復帰させ、人・物・情報の往来を活性化した。国際性を身につけた台湾人が増加してくると、「台湾人」という意識が育ち、彼らは中国人というよりも「台湾人」というアイデンティティを持つようになる。

現在の仏教の活況は、こうした台湾の現代史と軌を一にするように見える。それは、台湾民衆のアイデンティティ形成の過程と決して無縁ではない。明らかなのは、台湾においては今の盛況が、仏教の復古でもなく復興でもないことである。国際社会で翻弄される台湾において、仏教は民衆に癒しを与え、民衆は仏教に癒しを求めた、ということでもないようである。台湾人となった台湾民衆にとって、中国人である自らのルーツを確認するには、中国文化の継承が不可欠となる。中国人の本源回帰の経路に仏教があったということか。それとも、台湾の必要とする国際性は、仏教の普遍性から供給されるということか。観察の眼は過去にも向けられ、未来にも向けられる。

我々の関心を率直に表現すれば、その湧き上がるエネルギーはいかなるものか？ それはどこから湧いてくるのか？ それを汲み上げる装置はどのようなものか？ ということになる。或いはまた、民衆を引きつけ

てやまない仏教の魅力とは何か？とあらためて問うことになる。

仏教は本を読むだけではわからない。宗教は論理ではない。また小説でもない。仏教徒であっても、在家の信者となって信に生きる人、出家して僧となり開悟をめざす人。どちらにも真剣な大きな決断があったはずである。生活のために坊さんをするという話ではない。寺に生まれたために不承不坊さんになるということでは決してない。我々は内をこそ見るべきであると考えた。外から推測や希望を云々する前に、先ず台湾の仏教団体の熱気の中に入って観察することが必要であると考えた。

二 台湾における仏教のひとつの在り方

太平洋戦争後、中国は日本の支配を脱し、国共内戦を経て、国民党は中華民国政府を台湾省に移した。そのため、共産党政権を逃れて大陸から移住した僧侶や篤信の在家仏教徒が多く、彼らを中心にして中国仏教が伝えられた。以来、日本支配下で伝えられた日本仏教とは異なる仏教信仰が新たに台湾に移植されて定着し、今日では台湾仏教とも言うべき様相を呈するに至っている。

なかでも、「人間浄土」を標榜し、民衆の支持を受けて急速に台頭した佛光山は、現代社会の抱える諸問題に対応する柔軟な取り組みを行い、多岐にわたる活動を展開している。教育・文化・慈善・共修という四つのコンセプトの下に、「佛光普照、法水長流」の理想に沿う活動がエネルギーギッシュに展開されており、それらが更なる民衆の支持を呼び起こす

ことになっている。

アジア仏教研究会は、このように多様な活動を展開している佛光山に注目した。中国仏教を正統に相続すると自負する台湾の仏教界の中でも、佛光山は禅淨双修の修道の立場を採り、僧侶は座禅と念仏を両方とも取り入れた修行生活を送る。日本浄土教に属する我々には念仏を接点として理解しやすいと思われる。また、佛光山の海外施設は数多く、日本国内にも佛光山本栖寺、東京佛光山寺、宇都宮禅淨中心、茨城禅淨中心、千葉禅淨中心、横浜禅淨中心、杉並禅淨中心、筑波禅淨中心、名古屋禅淨中心、群馬布教所、大阪佛光山寺、大阪佛光縁、北堀江布教所、神戸布教所、福岡佛光縁がすでにあり、来日台湾人あるいは在日華僑の人々を主たる対象に活発な布教活動が行われている。日本語を修得した尼僧さんが赴任しておられ、情報を得やすい。名古屋禅淨中心には尼僧の覺耀法師が着任されており、資料集めでお世話になった。

更に、佛光山の僧侶には日本での留学経験者が多い。これらの日本の事情にも通じた人たちと日本の学界の間には、既に交流を重ねて形成された豊かな人脈があり、我々はこの人脈を活用させていただいた。大麥に好都合で有益であった。

アジア仏教研究会は、佛光山の活動の現状を把握し交流するためにメンバーを派遣した。前田惠學団長、渡辺信和副団長、武田龍総括幹事の三名である。幸いなことに、我々の研究計画に対し、同朋大学から研究助成を受けることができた。記して感謝を申し上げる。

教理の理解だけでは仏教の信仰はわからない。我々がめざしたものは、現代の台湾における生きた仏教信仰の把握であり、名所旧跡や由緒の地などの過去の遺跡の探訪ではない。また經典の内容を実証する証拠を捜し求めたわけではない。台湾の民衆が信仰する姿を通して、台湾の仏教を把握し理解しようとしたものである。第四章は、その交流を通して実際に体験したことを記した見聞録である。旅程とともに各種の情報を盛り込んで記した。台湾の現代仏教の在り方を掬い取ったところを読者の理解に供したいと願うものである。

三
略說
台灣仙教史

「政治体制は違っても、中国と台湾は同じ中国であり、そこに住む人たちもまた同じ中国人であり同じ文化を持つから、台湾で中国仏教が正統に相続されたのは当然のことである」という見方は有効であろうか。

台湾が中国仏教圏に組み入れられたのは、それほど古いことではない。古くは琉球と呼ばれた時代もあるが、台湾が中国大陆の政権の視野に入っただのは、明末・清初の頃のことだ。鄭成功（ていせいこう）が台湾からオランダを追いつし（一六六一）、台湾を明朝復興の拠点とするために統治を始めた時からとされる。仏教が伝えられたのはその頃と言われる。その後は清朝の版図に組み入れられて、福建省の一地域となった。

仏教信仰は清朝中期には本格的に伝えられるようになり、その主流は居士（篤信の仏教徒。僧侶に代わり得る在家の職能者でもある）の人々

が主導する齋教であつた。齋教とは、明代中頃に始まつた「無為教」、あるいは福建省の「無生老母」信仰の影響を受けた仏教の流れで、在家色の強い一派であるが、民間信仰というよりは仏教の要素が強く、在家の身での修行と菜食を強調するのが特徴である。日本支配以前の仏教は、この齋教が一般に信仰されていたのであつた。現代の台湾の仏教を考える時、齋教が長年にわたり台湾で形成した土壌というものは決して無視できないのである。

日本支配期には、日本仏教の各宗派が布教師の派遣や布教所の建設をおこない、また台湾人僧を日本の学校や専門道場に入學させて人材の育成にあたるなどの積極的な布教伝道活動を展開した。しかし、日本化政策に沿ったこのような活動は、日本仏教が戒律を重視しない（あるいは戒律に無縁の態度をとった）ことから、民衆に支持されることはなかった。戦後、大陸から移住して来た僧侶や居士たちが、反日の精神から、その影響を速やかに払拭してしまったのも当然である。以来、台湾では戒律重視の仏教となり、授戒や伝戒が權威をもって行われ、現在の活況を呈するに至ったのである。

中国大陸では、仏教は中華人民共和国の建国以来混乱し、文化大革命では攻撃迫害されて大きく衰退した。大陸には仏教の名所旧跡、由緒の地などの過去の遺跡はあっても、現在の生きた仏教を見ることは難しい。しかるに、中国仏教を正統に継承したと自負する台湾では、それが可能である。

仏教に関する限り、中国大陆で廃れたものが、台湾で隆盛を迎えるという事態が出来た。しかも、台湾での隆盛は、一部の限られた富者による道楽や後生願いというような段階をはるかに凌駕している。老若男女を問わず、貧富を超えて民衆を魅了し、顕著な成果を挙げている。

ところで、台湾とは地名であり、正式な国名ではない。中国大陆の東の海に浮かぶ台湾島とその周辺地域を指す言葉であり、古くは琉球と呼ばれた時期もある。台湾島は現在では中華民国台湾省である。中国を代表する政府として、現在は中華人民共和国政府（北京）があり、日本は一九七八年「日中平和友好条約」を締結して国交を結んでいる。そのため、日本と台湾との間には正式な国交は無くなったが、人も物資も情報も活発にしかも大規模に往来しており、親しい隣国として日本社会で認知されている。中華民国というより台湾の名称で親近感をもって受け入れられている。

「台湾」という呼称は、本稿では地名を表すほかに、中華民国、中華民国政府を表す名称としても用いている。「台湾」という言葉の使用は、現在の日本社会の慣用に従い、使い分けについてはいちいち断らなかつた。諒とされたい。

第二章 台湾仏教に関する覚書

「メモ 一」 浄土教について

浄土教とはどのような思想であったのか？ 来世で浄土往生を果たすことを勧める教えなのか、現世に浄土を建立する教えなのか、五濁の世を浄土に変える原理となる教えなのか。

浄土往生とは何か？ 個人の体験の範囲にとどまるのか、同時代の人々の共通体験になりうるものか。

仏国土とは何か？ 各自の心のことか、個人の等身大の規模か、関心や認識が及ぶ範囲のことか、客体としての世界を言うのか、それとも唯識所成つまり心に写る映像のようなものなのか。

インドに興った浄土思想は、中国に伝えられて内容を大きく膨らませ、その性格を変えた。浄土教を深く理解するには、中国浄土教から更にその淵源へと溯及する作業が必要になる。それには、中国とインドとの両方向から浄土思想・浄土教を学ぶ必要があるろう。

「メモ 一二」 人間仏教について

現代の台湾で最も影響力のある理念は「人間仏教」である。仏教をより現代の生活に合わせて解釈する考え方で、人間とは「人世間」^{にんせけん}を言い、「人の世」「この世」を意味する。清朝末期から民国初期にかけて太虚法

師が提唱する中国仏教の改革運動の中から生まれたという。太虚法師は、当時の仏教の凋落に危機感を抱き、中国仏教の組織化、日本仏教との協調、仏教の国際化などの推進を試みた。民国十年（一九二一）（一九四一）の頃、中国本土において、仏教の現代化の動きが見られた。仏教教団の組織化、教育の現代化、仏学研究の興隆である。

「人間仏教」は、学僧として名高い印順法師が一九五一年に提唱した。政治、農業、工業、商業など世俗社会の各分野における仏教徒の活動を鼓舞しその世俗の活動を奨励するもので、農会、工会、商会、仏教会を組織するように勧めた。更に、言論と出版の自由、教育の平等、経済の平等を図り、政府に反対する野党にも選挙経費を提供するという主張であった。

印順法師の没後、社会の各分野から従来の仏教のあり方に反省を求める声が起こり、経済界、仏教会の反省をも引き起こし、多くの仏教団体が実践するようになった。現在の台湾には、佛光山、慈濟功德会、法鼓山農禪寺という三つの有名な道場があり、人間仏教を実践している。

「メモ 三」 出家の概念について

出家は在家の対立概念である。ところが日本の仏教では、出家の中に在家の要素が大量に入り込んでおり、戒について学ぶ機会も無いため、敢えて出家を言う理由が見当たらないところまできている。出家は家業の継承という程度の意識で行われる。日本仏教では戒が分からなくなっ

た。台湾では、出家を望む者は、沙弥戒、具足戒、大乘円頓戒を受けて正式な僧尼となる。

「メモ 四」 出家者の就労について

今回の台湾訪問で気づいたことが二つある。一つは、尼僧さんたちが、専門性の高い仕事に就いていること。佛光山が設立し運営する各種事業体では、出家の尼僧さんが在家者の社員と一つ職場で同じ仕事に従事している。遠慮も遜色も無い。自然の姿で生き生きと働いている。台湾では、出家者の就労について、作務の延長と考えられているのか、忌避も無く疑問も無いようである。佛光山の教えの一つに「一日不倣、一日不食」とある。ここが南方の上座仏教（テーラワード）圏とは違うところである。

現地滞在中に、「女性が自己実現のために出家して尼僧になる」という発言も聞いた。台湾における出家の意義について、綿密な聞き取りが必要である。

「メモ 五」 不非時食戒について

もう一つは、不非時食戒が緩められていること。さすがに夕食とは言わず、薬石と言う。日本の禪宗でもそう言うが、事情は大いに異なる。四方を海に囲まれた台湾は、海鮮料理をはじめ美味美食に恵まれ、豊かな食の世界を築いている。日本からグルメツアーに出かける人も多い。

その社会で、一切の肉食を断つという仏教の僧侶の在り方は際立った主張となる。素食（精進料理）へのこだわりは不殺生戒にもとづくものと考えられるが、テラワード仏教には肉食の忌避は無く、たとえ肉や魚の料理であっても、見・聞・疑について問題がなければその食を受けてよいとされる。三輪清浄である。しかし、台湾の僧たちは肉食を厳格に避ける。彼らの食する料理には鰹の出汁^{だし}さえ使わない。私が「鰹節で出汁^{だし}を取るのでしょうか？」と尼僧さんに尋ねてみたら、「鰹は魚です」とたしなめられた。一方、上座仏教の僧たちは、正午から翌日の暁に至るまでの時間（非時）に食事をすることを厳格に避ける。彼らが食事できるのは、明け方から正午までに限られる。ところが、台湾では戒律を重視しながらも、僧侶は夕食を食べる。戒を保ちながらの便法であろうかと思案する。

この二点は、中国仏教を正統に継承したと自負する現代の台湾仏教の特徴といえる。

「メモ 六」 朝山礼拝^{ちやうさん}について

日本仏教にない礼拝作法に朝山礼拝がある。作法は三歩一拝で、三歩進むごとに五体投地をもって一拝するというものである。佛光山では開山四十周年を記念して朝山礼拝が熱心に行われている。全身を用いた礼拝を山門から始めて大雄宝殿に至るまで繰り返す。

朝山の主旨は、「浄化身心、増強体能、培植道種、提昇信仰、消業除

障、精進仏道、互結善縁、直通仏国」とされ、実践者には感恩の心、慚愧の心、思斎の心、恭敬の心、大信心、菩提心が具わるものとする。この慚愧の心の説明には、「この身は業障が多くて如来の金色身を見ることができないことを懺悔する」とあり、仏教の修道において見仏の体験が重視され期待されている。佛光山では団体ごとにまとまって実践するように呼び掛けている。

「メモ 七」 素食について

私たちの台湾滞在中に素食をご馳走になる機会が十三回あった。ホテル宿泊時の朝食三回の他はすべて素食をいただいたことになる。訪問先で思わぬ歓待を受け、おいしい料理をご馳走になった。改めてお礼を申しあげる。私たちがいただいたものが、おもてなし用のご馳走であり、決して家庭料理でもなく、また出家が毎日摂る一汁三菜の食事ではないとしても、十三回もいただければ、傾向が読み取れる。

素食は粗食（粗末な食事）ではない。精進料理である。しかも鰹出汁^{だし}さえ使わぬ厳格な菜食料理である。いずれの時も、味は勿論のこと、色彩や食感や盛り付けなどにも五感を楽しませる工夫が凝らされていた。粗末どころか、とても手間のかかった料理であり、丹精込めた料理でもてなしていただいていることがわかり、思わず感謝の気持ちが湧き上がった。

僧院生活であっても、食を楽しみ、食を大切にすることで、質素儉約



佛光山の朝食の様子

を旨とする日本の禅文化には見られないものと思う。私たちが体験した素食は、多彩にして実に豊かな料理の集成であった。いくつかの寺院では厨房も見学させていただいたが、どこも近代的な設備を持ち、清潔できれいに整理整頓されていた。毎日そこで僧侶と在家者（ともに女性であることが多い）とが協同して調理する。食事は僧侶に供されるだけでなく、参詣人にも供されて、和やかな雰囲気でする光景が幾度も見られた。

調理技術を持った人たちが出家することもあり、精進料理は近年著しくレベルアップしたという。寺院の食事だけでなく、市井の素食料理店の繁盛ぶりも目立つ。エコロジーやダイエット志向・健康食への関心という要素、あるいは戦前の斎教の影響という要素もあるが、現在の素食の盛行という現象は、仏教徒（僧俗ともに）の活発な活動に共感する雰囲気の流れでもあらうと考える。

「メモ 八」 漢訳経典について

佛光山の編蔵処を訪ねた折、『佛光大蔵経』の編集について説明を受けた。「民衆に経典を届け、仏教を伝えたい」という発願と、民衆が読んで理解できる大蔵経を作りたい、という編集方針が説明された。現代のIT技術を駆使してあらゆる経典を網羅して校合した学術的な大蔵経の編集を目指すのではなく、「民衆に理解できる大蔵経」を目指す聞き、なぜそのような方針が必要かを尋ねると、意外な返事が帰ってきた。

「一般民衆にはあの文章は読めない」という。經典の文章は難し過ぎると言われた。

漢字文化の担い手である中国人が漢文を読めないとはどういうことか。漢文の仏教經典を読みづらいているのは日本人ばかりと思っていたら、中国人もそうであることを知った。「宗教は阿片である」という思想で教育された大陸の中国人はともかく、台湾民衆にとっても仏教經典の漢文は読みづらいそうである。

問題は漢訳經典の文章表記にあるという。そのため『佛光大藏經』所収の經典の表記には、標点を付し分段を設けるという思い切った処置が施されて現代の中文（台湾人の国語）に近づけてある。

漢訳經典は私たち日本人にとっては外国語文献であり、翻訳成立の年時についてはあまり意識せずに、漢文という範疇で一纏めに扱うことが多い。しかるに今の中国人にとっては、漢訳經典は古典であり、現代文ではない。

古典文献に接するには、それなりの訓練が必要であるが、仏教經典の漢文は、現代の台湾の一般民衆がすらすらと読み進めるものではないということである。經典を読んでも文意が取れず内容が理解できないのは、仏教についての素養が無いということではなく、「經典の文章が時代遅れのもの」だからということになる。つまり、仏教經典の漢文は現代の中文とは大きく違うため、現代人にとって仏教經典は既に難解な古典となっているのである。そのため彼らが仏教に接近しようとする時、經典

を読むという営為を通して仏教の教えに親しむことは困難になっており、一般民衆にとって、伝統的な刊本の漢訳經典によって理解するという回路は効果的ではなくなっているのである。

我々は、手にする仏教經典を「お経」として受けとるのみで、文学作品として見ることはまずない。仏教經典の漢訳の歴史は約一千年というが、その間の通用言語の変化には大きなものがある。仏教の理解が進むにつれ、初期の翻訳から後期の翻訳になると、訳語訳文は大きく変化している。それを同列に扱うことは無理であろう。我々が翻訳經典を読む場合、そういう時間の経過まで考慮することはあまりないと言ってよい。一千年という時の隔たりは、我々の感覚からすると、源氏物語と現代恋愛小説ということになるか。古典文学と現代小説との違いを無視して両者を取り扱うことはできない。

第三章 『佛光大藏經』の編集について

一 『佛光大藏經』刊行の意図

『佛光大藏經』の刊行は、佛光山の主要な事業のなかでも最重要のもの一つであり、極めて大きな意義を有するものである。それは、ひとり佛光山のみならず仏教界にとっても極めて重要な事業となる。佛光山の編蔵処を訪ねた折、佛光山編『佛光大藏經』の編集について話を伺うことができた。大正新脩大藏經を始めとするこれまでに評価の定まった

刊本とは別に新しく大蔵経を編集し刊行する意図は奈辺にあり、またいかなる意義を有するか。『佛光大蔵経』『阿含蔵』電子版の「佛光大蔵経編修縁起」から要旨を引用して紹介する。

仏教には不変の価値がある。仏法を研究し信解し論ずるには、時代に適応した方法と技術を用いて、人々の心を古今を貫通する大切なものに向くように図るべきである。

如來の教えは漢の時代に中国に伝えられて以来、歴代の王朝の大徳たちが翻訳して典籍を著している。宋元明清の各版大蔵経に蒐集され編集印刷されたものは、聖言経教を保存している。しかるに刊行された各版の三蔵には分段と標点がなされず、そのために現代人は經典を読んで内容を深く理解することができない。初学者のよく理解するところではない。信と学をころざしても難しいだけでよく内容をつかむことはできなかった。そのため佛光山は一九七七年に佛光大蔵経編修委員会を発足させ、数十人の学者を集め長い年月をかけて各版の大蔵経を蒐集して、文字の校勘をなし、全経の校訂を行い、経文を段落に分け、文章に標点を施し、名相の釈義、経題の解説を付し、経のうしろには索引を設けた。

私たちの願いは、現代人が読むことができ、読んで理解し易く、理解して信じ、信じて行い易いという仏教聖典を編纂することである。『佛光大蔵経』の刊行により、仏法が永遠に相続され人々に伝

えられるための一助たらんと願うものである。

『佛光大蔵経』は新しい編纂方針により、次のように分類される。

- | | | | | | | | | | |
|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|
| 1 | 阿含蔵 | 2 | 般若蔵 | 3 | 禪蔵 | 4 | 浄土蔵 | 5 | 法華蔵 |
| 6 | 華嚴蔵 | 7 | 唯識蔵 | 8 | 秘密蔵 | 9 | 小乗蔵 | 10 | 律蔵 |
| 11 | 本縁蔵 | 12 | 史伝蔵 | 13 | 図像蔵 | 14 | 儀誌蔵 | 15 | 文芸蔵 |
| 16 | 雑蔵 | | | | | | | | |

清代の『龍蔵』以来三百年を経て、『佛光大蔵経』の刊行という事業は、中華文化の向上と発揚に資し、仏教の智慧の教えを相続して無尽の灯を点し、般若の華を開かせ、仏光普照、法水長流を図るものである。

二 編集方針

編修委員会が各経について合議のうえ底本を決める。編修委員会は編集の各段階において合議し、最良の經典を作り、それを集成する。

入手した資料には、『佛光大蔵経』の編集に採用された校勘と標点・分段の方法が具体例を掲げて示されている。以下にその骨子を紹介する。

1 『佛光大蔵経』に採用された校勘について

1 底本に校勘を必要とする文字が同一巻中に多数ある場合、最初に現れる箇所で校勘し、その校勘の注の上に「*」記号を付ける。それ以降の当該字に重ねて注を付けることはせず、その文字の右上角に「*」

記号を付けるだけとする。

2 底本の字句に明らかな誤りがあれば、他の版本や参考書籍に依って修正し、校勘の注の中で説明する。

3 底本の字句が他の版本や参考書籍と異なる場合、正しいと肯定するものが無ければ、校勘の注の中で説明する。

4 底本の字句に、前後の文意によって脱落の文字のあることが疑われる場合、対比すべき他の版本や参考書籍が無ければ、校勘の注の中でそれを説明する。

5 底本の文字が明らかな印刷の誤りである場合、他の大蔵経版本や参考書籍を校勘に使用しなければ、前後の文意に依って修正し注を加える。

6 底本に明らかな印刷漏れがある場合、校勘に使える他の版本や参考書籍が無ければ、前後の文意に依り適当な文字を補い、校勘の注の中で説明する。

7 底本に明らかな印刷漏れがある場合、校勘に使える他の版本や参考書籍があれば、それに依って漏れた文字を補い、校勘の注の中で説明する。

8 底本の文字に、前後の文意に依って明らかに不用の文字のある場合、校勘に使える他の版本や参考書籍があれば、それに依って不用文字を削除し、校勘の注の中で説明する。

9 底本の文字に、前後の文意に依って、印刷の錯簡（入れ違い）の疑いのある場合、校勘の注の中で補充する。

10 底本にある文字が別の本の同じ箇所が無い場合、校勘の注の中で説明する。

11 底本に仏教の特殊な學術用語や艱澁の詞句がある場合、辞書に依り注解を加える。

12 校勘の注に使用した版本の名称は次のとおり

大正新脩大蔵経 略称「大正本」

高麗大蔵経 略称「麗本」

宋版磧砂大蔵経 略称「磧砂本」

明版嘉興大蔵経 略称「嘉興本」

清乾隆大蔵経 略称「清蔵本」

卍正蔵経 略称「卍正本」

卍續蔵経 略称「卍續本」

大日本佛教全書 略称「佛全」

2 『佛光大蔵経』に採用された標点と分段

(一) 標点符号

1 「。」 句点。文意の完足を表す符号。句末に用いて句を結束する。

2 「、」 読点。短い停頓を表す符号。詞組あるいは短かい語などの語尾に用いる。意思の隔断と、読む時には語気をここで停頓させる。

3 「、」 頓号。隔断のための最小の符号。語気を少し停頓させる場所に用いる。並列される同類の実体詞などの連用を隔断する。

4 「:」 分号。一つの句の中に二個以上の平列・対立の分句がある場合、隔開のために必ず用いる。

5 「！」 驚嘆符号。人間の強烈なる感情を表す符号。情感の高揚がなければ用いない。歓喜が極点に至った、悲哀が極点に至った…場合に用いる。この符号は一種の力で、文章に力を与え読者の注意を引きつける効果があるが、多用するとその効果を失う。

6 「？」 疑問符。

7 「…」 冒号。前後の意思の等しいことを表す符号。上下を隔断して独立の成句とするために用いる。

8 「」 単引号。引用符号。文中の引用の始まりと終わりを表す符号。あるいは文中の特別な意義をもつ詞句を表す。「は前引符号、」は後引符号。

9 「『』」 雙引号。二重引用符号。引号内に更に詞句を引用する時に用いる。

10 「《》」 書名。

11 「〈〉」 篇名号。

(二) 標点の打ち方と注意事項

1 偈・頌

(1) 文章中に偈・頌があれば、段落を新しく起こし、位置は第四字より始める。もしこの偈・頌が七字一句であれば、四句で一行とする。

(七字一句の偈・頌が四句あるだけであれば、二句で一行とする)

(2) 引用文中に偈・頌があれば、段落を新しく起こし、位置は第四字より始める。そして偈・頌の前後に二重引用符号を置く。もしこの偈・頌が五字一句であれば、四句で一行とする。

(3) もしこの偈・頌が四字一句であれば、六句で一行とする。もしこの偈・頌が八句あるだけであれば、煩わしくても四句で一行とする。

2 文章中の呼称・命令・希望の文は驚嘆符号を用いて表示する。

3 『佛光大藏経』『浄土蔵』目録

3 経文中の引用文は、段落を分ける場合には、各段の始まりの前にはすべて「」を置き、引用文の最後の段落の末尾だけに「」を置く。

『佛光大藏経』『浄土蔵』目録は、経部・注疏部・著述部・纂集部・附録という五部に類別されている。

とくに経部には以下の諸経が配当されている。

仏説阿弥陀経 外七部として、阿閼佉国経

般舟三昧経

仏説無量寿経

仏説阿弥陀経

仏説観無量寿仏経

阿弥陀鼓音声王陀羅尼経

後出阿弥陀仏偈経

悲華經

仏説弥勒下生經 外十部

薬師琉璃光如来本願功德經

弥勒菩薩所問本願經

仏説弥勒下生經

仏説弥勒大成仏經

仏説観弥勒菩薩上生兜率天經

仏説弥勒来時經

一切智光明仙人慈心因縁不食肉經

維摩詰所説經

仏説如幻三摩地無量法門經

大聖文殊師利菩薩仏刹功德莊嚴經

仏説観仏三昧海經

すなわち「浄土蔵」に収録される経は、阿弥陀経類と弥勒下生経類の諸経ということである。

「浄土蔵」注疏部には、

阿弥陀経疏外六部、阿弥陀経要釈外三部、観無量寿経疏外五部、正観記外三部、無量寿経義疏外六部、弥勒下生経疏外六部、維摩経講話、浄名玄論外一部、注維摩詰経、説無垢称疏、薬師経直解外二部、維摩経無我疏、維摩経文疏、維摩経玄疏外一部、維摩義記が収録されている。

著述部には、

念仏鏡外四部、浄土鏡観要門外九部、安楽集外六部、中国浄土教理史、

台湾仏教の現状

浄土与念仏法門外六部、印光法師文鈔

纂集部には、

角虎集外四部、浄土聖賢録外一部、廬山蓮宗寶鑑外一部、楽邦文類外三部、浄土十要、東林十八高賢伝外四部、

附録には、

浄土教概論、弥陀浄土法門集、浄土新論、念仏浅説、提要（未収入浄土蔵の典籍）

第四章 台湾仏教の現状見聞録

同朋大学佛教文化研究所アジア仏教研究会が派遣した訪問団の構成は次のとおりである。

団 長 前田恵學（佛教文化研究所研究顧問）
副団長 渡辺信和（佛教文化研究所幹事室長）
総括幹事 武田 龍（佛教文化研究所客員所員）

我々の出発直前に研究所の意向が伝えられ、台湾の福祉の状況、特に仏教の理念にもとづき仏教徒の関わる福祉すなわち仏教福祉について、現地の事情を視察し、資料を収集してほしいという要請を受けた。そのため、台北到着後、直ちに研究所の意向を伝え、幼児・児童関係の施設、老人の介護施設、高齢者向けの生涯教育、これに加えて、可能であれば

ターミナルケアの施設などの視察を実現するべく台湾側に依頼した。慈悲や布施という仏教の徳目を具体的に実践するありさまを見学すること

が必要であると考えたからである。幸いなことに関係者のご尽力により、研究所の意向に添うような訪問先を紹介していただいた。そこで、急遽、日程を組み替え、我々の本来の目的を達成するための行動を縮小して、福祉関係の施設を訪問先に組み入れた。そのため事前の準備もなく、福祉についての予備知識も不十分なまま各地を訪問することになったが、結果として、台湾の社会事情や、宗教団体と福祉活動との結び付きについて、文献からだけでは得られない知見を得た。おかげで、教理教学や信心信仰という正面からのアプローチとは違う別の面からも台湾仏教理解への手掛かりを得ることができたように思う。まさに禍福転々、塞翁が馬ということである。

いずれの訪問地も、オープンな姿勢で我々の視察見学を受け入れて貴重な資料を提供してくださった。我々の遠慮の無い質問にも丁寧に答えていただいた。関係各位にあらためてお礼を申しあげる。

今回の訪問では、快適な宿舎の提供など様々に便宜を図り温かく迎え入れていただいた佛光山と関係者の方々、とりわけ尼僧の皆様、福祉施設の関係者の方々にたいへんお世話になった。その一々のお名前は記さないが、ここに満腔の謝意を申しあげる。

(以下の本文中の☆印は佛光山関係の寺院・施設等であることを表す。)

九月二五日(月)

中部 九・三〇発 C1一五一(中華航空)
台北 一一・三〇着

空港で義守大学教授依昱法師(文学博士)の出迎えを受ける。以後、法師は我々の帰国まで行動を共にし、多忙な時間を割いて我々の案内と通訳の仕事を引き受け、さまざまな便宜を図ってくださった。現地での無駄の無い移動や面会の予約などは、法師の類い稀れな行動力と人脈に依るもので、多大なる恩恵をこうむったことを感謝をもって報告したい。今回我々が持ち帰ることができた豊かな成果は、法師の尽力に負うところが大きい。深甚の謝意を申し上げる。法師は、今年の台湾の「教育百人團」に選ばれるという榮譽を受けられたばかりの有能機敏な人である。パースリ学仏教文化学会は依昱法師を日本に招聘し講演会を開催した。二〇〇六年八月二十三日に同朋大学において「台湾の人間仏教」と題して講演をされた時、我々の台湾視察について打ち合わせをし、希望を伝え協力を要請してあった。法師からは我々の出発直前までさまざまな情報が寄せられ、入念な準備と受け入れ態勢がとられているようであった。用意の車で空港から移動する。

一 金光明寺 ☆

台北県三峡横溪東路二六八号

二〇〇二年開創。住持は慈容法師。尼僧十数人在籍。案内は覺軒法師。寺号は金光明経による。四百余坪の大雄宝殿にはミャンマー伝来の玉仏（高さ約八・四メートル、重さ約五十トン）が安置され、十大弟子の立像と八相成道図（レリーフ）の見守る中で千人が同時に参禅可能と言う。

大会堂（大雄宝殿の四階）は二千人を収容可能。禅堂・図書館（蔵書約十万冊）・教室数二〇室・食堂・宿坊（二百人の宿泊可能）

金光明寺の活動は、

念仏共修会 毎週土曜午後二時半

大悲懺法会 毎月第一土曜午前九時半

八閼斎戒 毎月第三土曜午前八時

金光明法会 毎月第三土曜午前九時半

精進斎戒会 春・夏・秋・冬の四季毎に

弥陀仏七 農曆十一月

大專青年斎戒会 毎年一月・七月

教師斎戒会 毎年一月・八月

二 佛光人間大学 ☆ 校長は慈容法師

金光明寺に併設された成人大学。サテライト教室の運用を視察する。

台湾仏教の現状



金光明寺の楼門



金光明寺にて依昱法師（中央）と



金光明寺の大雄宝殿

台湾の大学（一五〇校ほど）には仏教学を教える講座・学科はないため、寺を通して仏教を教えるという役割を担う施設。生涯教育の必要は文部省も認識している。開設講座数が多い。土・日曜日に学生が集まる。

教室にある生徒用の机は大き目である。幅と奥行きがたっぷりとあり、机上に本や資料を数多く並べることができる。配慮が行き届いている。

サテライト教室では、インターネットで海外と同時に講義を行える。

昼食（素食）をいただく。

三 佛光山台北道場 ☆

台北市信義区松隆路三二七号一三樓

住持は慈容法師。尼僧二十数人在籍。松山駅前にある十四階建ての大規模ビルに入った総合的施設。妙衆法師の案内で都市型活動を視察する。大雄宝殿は、翌日に挙行される仏化婚禮（仏前結婚式）の飾り付けがなされ、「菩提眷属」「美滿姻縁」の双聯が掲げられており、普段の簡素な趣きとは異なり、色花の溢れる華麗な荘厳であった。滴水坊では新郎新婦が両親とともに打ち合わせをしていた。大雄宝殿の下の階には社教館・人間衛視（テレビ局）・如是我聞出版社・「人間福報」紙などが入っている。いずれも佛光山が経営する。

四 人間衛視（BLTV） ☆

台北市信義区松隆路三二七号九樓之一

張宗月總經理の案内。スタッフは八〇余名で一日二〇時間の放送をする。二六か国の放送局と連携。人間福祉と教育に関する番組作りに力を入れる。漫画番組も制作放送し好評を博している。最近作はアニメ「沙弥欢喜看人間」である。スタジオでインタビューを受ける。

尼僧さんたちが生き生きと活動している。

五 如是我聞出版社 ☆ 一九九七年設立。

仏教梵唄と讃歌を収録し七〇種以上のレコード・CDを出版している。声明は師匠から弟子へと直接伝授されてきたが、これでは限られた範囲でしか伝えられず、途絶える心配もあるため、新しいメディアを活用して仏教の声明を保存伝承するという仕事を担当する。佛光山の僧侶が執行する法要の全体を収録する。

梵唄・声明には美声が必要だが、念仏は自分の声でよいとのこと。

六 人間福報 (Merit Times) ☆

台北市信義区松隆路三二七号五樓

発行人は心定和尚。日刊紙。十七万部発行。社員八〇名。妙益副社長の案内で編集部を視察。

ちなみに、我々の人間衛視・宜蘭の佛光大学・宜蘭仁愛之家の訪問が

「人間福報」紙の記事になり、九月二十八日付け紙面第十六面に写真入りで大きく掲載された。

台北道場に戻り、夕食（素食）をいただく。向こうのテーブルでは尼僧さんたちが楽しそうに夕食を摂っている。今日も充実した一日だった、という雰囲気満ちている。

（台北 国賓大飯店泊）

九月二十六日（火）

高速道路を一時間以上走り、新しく完成したトンネルを通り抜け、東海岸の宜蘭へ向かう。

七 佛光人文社会学院（佛光大学） ☆

宜蘭県礁溪郷林美村林尾路一六〇号

校長趙寧博士。副校長の呉欽杉教授が出迎えてくださり開学以来の大学の概況を紹介してくださいました。

二〇〇〇年に大学院（修士課程）のみで開学。二〇〇一年に博士課程開設。二〇〇二年に学部開設。学生数二一〇〇人。

〔学部〕

人文学科系所

文学系（所）

哲学系（所）

写真削除

宗教学系（所）
 歴史学系（所）
 人類学系
 生命学研究
 芸術学研究
 社会科学系
 未来学系（所）
 社会学系（所）
 政治学系（所）
 経済学系（所）
 公共事務学系（所）
 伝播学研究
 管理学研究所
 資訊・心理與教育相關系所
 資訊学系（所）
 心理学系（所）
 教育資訊学系（所）
 社会教育学研究所
 〔修士課程〕
 文学研究所
 資訊学研究

台湾仏教の現状

管理学研究所
 公共事務学研究所
 伝播学研究
 経済学研究
 〔博士課程〕
 文学研究所

教員は、教授二十四人、副教授一人、助理教授三十八人、講師四人、講座教授二人、合計八十六人である。（二〇〇五年度）

宗教学系（所）の主任は助理教授の劉国威博士。チベット仏教専攻。ハーバード大学で学位を取得。大谷大学出身の奥村浩基博士が宗教学系の助理教授として仏教学・原始仏教・パリー仏教文化を教授されている。

学内で奥村浩基博士、劉国威博士とともに昼食（素食）をいただく。

八 財団法人宜蘭蘭陽仁愛之家 ☆

宜蘭縣礁溪鄉龍潭村龍泉路三十一号

財団法人の老人ホーム。永勝主任の案内。

入居者は六十五歳以上の三十人。平均八十二歳、最高齢一〇三歳。政府から月に一人八千圓の補助がある。施設運営の必要経費は約百万圓。不足分は佛光山や信者からの寄付で賄う。

朝四時半から介護活動が始まる。食事・入浴・娯楽など。



仁愛之家の大雄宝殿



仁愛之家

老人介護の他に、近隣の小学生（八〜十三歳）の学習の場も提供しており、学校が終わってから、子供たちが集まって来る。

大雄宝殿は 薬師

釈迦・釈迦（ビルマ仏）・観音・地藏

弥陀

の諸尊が安置され、老人の施設であるためか、「現世では観音をたのみ、臨終では地藏にすがら」というように観音菩薩と地藏菩薩が祀られている。

我々の到着時には、入居者の老人たちが日本語の歌を歌って賑やかに出迎えてくださった。日本語が話せる人もあり、日本支配時代に幼少期を送った人たちであることがわかる。

活動協力費として台湾圓で六千圓を寄進し、日本から持参した菓子二箱を差し入れる。

この老人ホームには福寿学苑（銀髮族文化教室）が併設されている。高齢者向けの文化教室で、銀髮族とは言いえて妙と感心する。我々の訪問時には一クラス四十人ほどが英会話の授業中であつた。また各講座で製作された数多くの作品が教室に展示されていた。

九 佛光山蘭陽別院 雷音寺 ☆

宜蘭市中山路二五七号

地上十四階、地下三階建てのビル。各階の用途は、十一階十二階が大

台湾仏教の現状

雄宝殿で 大迦葉

釈迦

阿難

の三尊が祀られ、円柱と壁には五部の大乘経（地藏菩薩本願経、薬師如来経、法華経普門品、金剛般若経、阿弥陀経）を刻字。

十三階十四階は千二百人収容の大ホール。九階は佛光縁社教館・禅堂など。七階には佛光縁纪念馆、二階から五階には佛光大学と社区大学の教室とコンピュータ室。一階は宜蘭念佛會。地下一階は滴水坊などの飲食施設。地下二階三階は駐車場である。

写真削除

蘭陽別院大雄宝殿の円柱

蘭陽別院の原名は雷音寺といい、ここが一九五三年に星雲法師が念仏会を組織した宜蘭念佛會の発祥の地である。星雲法師はここでの実践で、板書や幻灯を用いたり、仏教青年歌詠隊、弘法隊を作り、学生会、児童日曜学校を組織するなど積極的な布教活動を展開し、非凡な力量を発揮した。また、星雲法師の第一期にあたる宜蘭での活動の中から、心平、慈莊、慈恵、慈容、慈嘉など後に佛光山を躍進させて台湾仏教の重要人物となる主要な弟子たちが出家している。

十 龍山寺

台北市廣州街二二一号

一七三八年、福建省晋江县安海郷の龍山寺の觀世音菩薩を分祀して奉祀する。本尊は觀世音菩薩。脇に文殊菩薩と普賢菩薩。

後殿に、天上聖母媽祖娘娘（航海の守護神、福德招来）

文昌帝君（天神さん、受験の神様）

関聖帝君（財運招来、悪霊退散、勝負必勝、商人の神様）

を祀り、觀音信仰をもとにした民間信仰の殿堂として有名な寺で、参詣の人波が途切れることがなく境内は熱気で溢れている。觀音さまに額づく人、経本を捧げ持ち読誦する人、合掌して線香を捧げ呪文を唱えながら礼拝する人、五体投地する人。全く個人の願望を祈念するのであるから、隣の人が何を祈ろうが我関せず、老若男女が自分のお願いに没頭する姿には逞しい生命力が満ちている。庶民の迫力満点の姿を垣間見た



龍山寺の祈願風景

思いである。

ポエ（半月形の二つの木片）を用いる占いを見た。年齢は六十歳前後とおぼしき男性が床にポエを何度も落とし占っている。自分の望む目が出るまで繰り返すという。判断に迷ってポエの目に託すのか、ポエの目までが自分の判断なのか。

後殿には、祈願の成就した人たちから贈られたお礼のお供え物が続々と届けられる。それに付けられた札には願主の名と「佛光普照」の文字が鮮やかに墨書されている。

また三川殿の内側には、篤志家が刊行し寄付した（印贈という）各種の経本類が山と積まれ、希望者に無償で配布されている。資料収集には最適の場所である。

十一 普門寺 ☆

台北市松山区民権東路三段一六三号十一楼

住持は永光法師。尼僧十二名在籍。

松山機場近くの繁華街の十二階建てビルの中にある。

夕食（素食）をいただく。

宿舍の国賓大飯店に戻り、疲れた体に鞭打ち、これまでに収集した資料を荷造りし、研究所へ発送する。送料は台湾円で六千四百圓を要した。

（台北 国賓大飯店泊）

九月二七日（水）

台北

九・三〇発

EF一〇五（遠東航空）

高雄 一〇・二〇着

空港で慧智法師の出迎えを受け、用意の車で佛光山へ移動する。

十二 佛光山 ☆

高雄県大樹郷興田村興田路一五三号

一九六七年、星雲法師により開山される。佛光山の四十年の発展は、譬えて「昨日は麻竹の荒野、今日は菩薩の叢林」と言われる。二つの山と谷に跨がる宏大な境内には、地形を利用して、数多くの中国様式の殿堂樓閣が並び建つ。その様はまさに偉容偉観である。

佛光山は、「人間仏教の道場」を標榜して、開山の精神を次のように記す。『図説 佛光山』より要旨抜粋）

佛光山は、開山建寺以来、人間仏教の立場を實踐して、文殊・普賢・観音・地藏の四大菩薩の慈心悲願を實現するべく努力してきた。佛光山の推進してきた人間仏教は既に国際的に認められ、重視されている。大衆の福祉を目的とする帰依の道場であり、仏陀の教えを承けて利喜の悲心を起こし、禪門の祖師たちの活発善巧の道風に循う。法会儀式はみな伝統の精神を延続し、儀制の鐘板号令・清規制度は叢林の古制を遵奉せざること無し。仏陀は現生を重視され、慈悲喜捨の四無量心を本懐とされた。佛光山は、出世の精神をもって現世の事業に取り組み、人間仏教をもって仏光浄土を開創する。

菩薩の叢林と称する僧団で実践するその修道内容は般若の生活である。思想の基礎は法界融和であり、修持する法門は人間歓喜である。一日なさざれば一日食えず。人間、これ浄土ならざるところ無し。

〔四大宗旨〕

「文化をもって仏法を広め、教育をもって人材を育成し、慈善をもって社会の福利をもたらし、共に修行することで人心を浄化する」

〔宗風〕

八宗兼弘・僧信共有 集体創作・尊重包容
学行弘修・民主行事 六和教団・四衆平等
政教世法・和而不流 伝統現代・相互融和
国際交流・団体共生 人間仏教・仏光浄土

〔活動の信条〕

人に信心をあたえ、人に希望をあたえ、人に歓喜をあたえ、人に方便をあたえる。

〔佛光道場の発展の方向〕

伝統と現代の融和
僧衆と信衆の共有
行持と慧解の並重
仏教と芸文の合一

現在は、概数で男僧一二〇人、尼僧千二〇〇人（そのうち四〇〇人は海外の分別院や禅浄中心へ赴任）。佛光山寺には毎日、出家と在家を合わせて約二千人が活動しているという。

滴水坊 慈恵法師が歓迎の昼食会を開いてくださる。法師は京都大学から大谷大学へ進み、舟橋一哉博士の指導を受けて修士を取得した人。前田先生とは旧知の間柄。話が弾む。

昼食（素食）には五種類の味の麺料理（ラーメン）を用意してくださった。その一つの味噌ラーメンは、慈恵法師が京都留学中におぼえた味を持ち帰ったものと言われ、それ以来日本の味噌は佛光山で大好評ということである。

大雄宝殿・禅浄法堂・舍利殿・浄業林などの殿堂を拝観する。

雲居楼 六階の個室を宿舎として用意していただく。

予定外に、星雲大師に面会できることになった。

傳燈楼 星雲大師に面会。穏やかな表情の中に意志の強さが読み取れる。

前田先生とは旧知の間柄。「釈尊は八〇歳、前田先生は八〇歳、私も八〇歳。三人合わせて二四〇歳」と話が弾む。慈恵法師、依空法師同席。依空法師は、東京大学で前田専學博士の指導を受け修士号を取得した人。

そこへ大陸の中国からの使節団が割って入ってきたため落ち着かない。しかし、後で事情がわかったことだが、もともとは彼らの方が先約のある主賓であり、予定外の我々の方が彼らの面会に割って入ったものであつ

写真削除

佛光山 大雄宝殿

写真削除

大雄宝殿 釈迦牟尼仏

写真削除

星雲大師に『三部経』を献呈する

た。使節団は、無錫市共産党委員会書記と市の部長、宜興市共産党委員会書記と市の部長、主任、理事の一行であった。

続いて夕食会が始まる。大陸で初めて出家したとして、慧宇法師、慧常法師が招かれる。彼らの和尚として、心培和尚、慧傳法師、慧倫法師が同席。中国の使節団が声高く賑やかに食事を進める。目を合わせて乾杯を繰り返す。突然贈り物の交換が始まり、中国使節団は軸などを星雲大師に贈る。我々も用意した経本（三部経一式）を「依るべき最も大切な経典」として献呈する。

中国使節団の目的は、宜興市にある大覺寺の復興を佛光山に依頼し、その承諾を得ることであった。そこは星雲大師の祖庭（出家した寺、場所をいう）であるから、その縁で依頼したいとのことである。贈り物も盛大になるはず。江蘇省の役所が仏教寺院の復興を計画し、共産党幹部と役所がそれを佛光山に依頼してくるという現状は興味深い。ちなみに復興計画寺院として、大覺寺・大明寺（鑑真和尚ゆかりの寺）・上海普門経舎・深圳滴水坊・蘇州嘉應會館の五つがあるという。

席上、星雲大師の「和諧」のエピソードが披露される。財物、平安、成功、和諧という四つの価値を四人兄弟に喩えた逸話で、星雲大師は、和諧の世界は心から始まり、和諧の気持ちがあれば、他の三者はみなついてくると説く。和やかな雰囲気の中で、大陸の共産党幹部と役人を前にして、大師が「少人数の信者を相手にしている時の説法は目立たず見逃されるが、多数の信者を相手にするようになると政府が注目する」とい

う思い出話をした時には、さすがに緊張した。相手を吞んでいるのか、気脈を通じているのか、胆力の勝負と感じた。尼僧さんたちの通訳でそれぞれの話題を語り合い、中国語と日本語が飛び交う和やかな宴であった。

依空法師から、食事中にさまざまな話を伺った。佛光山では各地の寺の住職は一任期四年としてのこと。寺を新設する場合、建てる役割の人と初代住職は別の人とする。浄土往生者に対して、「乘願再来」（またいらしてください）と言うが、これは回向文に含まれていること、など。

その後、浄業林で、佛七を見学した。佛七とは「念仏打七」のことで、七日間一心に仏を念じ瞑想する念仏三昧の生活をして、見仏の体験を得ようとするものである。阿弥陀経の「若有善男子善女人、聞説阿弥陀仏、執持名号、若一日、若二日、若三日、若四日、若五日、若六日、若七日、一心不乱、其人臨命終時、阿弥陀仏、与諸聖衆、現在其前、是人終時、心不顛倒、即得往生 阿弥陀仏 極楽国土」を根拠とする。七日間余念を交えず打ち込み、一心不乱であれば、臨終の時には阿弥陀仏が目の前に現れてくださるので、その姿を見ると心は錯乱せずに、この世で死ぬとたちまちに極楽浄土に往生できるのである。目的は見仏の体験である。日本の浄土教がこの行法に取り組まないことが不思議である。

佛光山で開催されるのは、在家者向け短期出家体験コースである。在家の仏弟子が出家に倣って僧団生活を体験するという模擬出家を体験する研修会であり、在家者の修道の励みとするための短期出家修道会であ

る。

募集要項には、参加資格として、正信正見を具え、僧団生活を真摯に学び、健康な十八歳から三十五歳までの未婚の男女青年。課程は、行門（実践）と解門（教理）を並び行う。費用は、教育費の五百圓を自費負担する。宿泊費一千圓は佛光山が提供する。衣服は佛光山の物を借りる。身分証の写しと履歴書（三百字以上）を添え、応募用紙に必要事項を記入して提出する。面接を通知すること。面接の場所は、台北道場、彰化福山寺、高雄佛光山寺の三か所である。応募用紙には、出家誓願の欄があり、短期間とはいえ、仏陀の定められた戒律を遵守し違反しないことと、佛光山の道風規定と指導を遵守し違反しないことを誓うことになっている。

ちょうど十月の佛七が、九月二十六日から十月二日に至る日程で開催されていた。百二十人の連友（参加者のこと）が参加しており、月に一度開催される佛七には毎回百人余りの参加者があるとのこと。

浄業林佛七の時間表は、次のとおり。

初日は

一三・〇〇までに集合

一三・四五～一四・四五 生活説明、

一五・〇〇～一七・〇〇 起七香 楊枝浄水・大悲呪・阿弥陀経・往

生呪・讃佛偈・念佛・繞佛・念佛・止静・開

静・開示・念佛・三帰依・回向

一六::三〇〽一七::四〇 出坡&盥洗

一八::〇〇〽一八::三〇 薬石

一九::三〇〽二一::三〇 晩課香 爐香讃・阿弥陀経・往生呪・讃佛

偈・念佛・繞佛・念佛・止静・開静・開示・

念佛・三帰依・佛光祈願文・回向

第二日から第六日は

五::〇〇 起床

五::三〇〽六::〇五 早課香 大勢至念佛圓通章・往生呪・讃佛

偈・念佛・三帰依・回向

八::〇〇〽一・一::〇〇 上午香 爐香讃・阿弥陀経・往生呪・讃佛

偈・念佛・繞佛・帰位・念佛・止静・開静・

讃佛偈・繞佛・念佛・止静・開静・念佛・拝

顔・三帰依・回向

一一::三〇〽一四::〇〇 午斎&養息

一四::〇〇〽一六::三〇 下午香 阿弥陀経・往生呪・讃佛偈・繞佛・

帰位・念佛・止静・開静・念佛・拝顔・回向

一六::三〇〽一七::四〇 出坡&盥洗

一八::〇〇〽一八::三〇 薬石

一九::三〇〽二一::三〇 晩課香 爐香讃・阿弥陀経・往生呪・讃佛

偈・念佛・繞佛・念佛・止静・開静・開示・

念佛・三帰依・佛光祈願文・回向



円満日は

五〇〇〇

起床

五〇三〇〇六〇五

早課香 大勢至念佛圓通章・往生呪・讚佛

偈・念佛・三帰依・回向

七〇〇〇〇八〇〇〇

出坡（寮房整理）

八〇〇〇〇九〇一〇

圓滿香 爐香讚・阿弥陀經・往生呪・讚佛

偈・念佛・繞佛・念佛・拝顔・三帰依・佛光

祈願文・回向

九〇三〇〇一〇〇五〇

座談会 心得分亨・總回向

一〇〇五〇〇一〇〇〇〇

叮嚀、告假出堂

一二〇一〇

圓滿賦歸

我々が見学したのは、晚課香の繞佛の頃で、続く念佛は庄巻であった。經行から復し自席に着座して称えるうちに次第に法悦に浸る境地に入り、その後の止静では突然の静寂となり、何も無い空間に放り出されるような感じを受けた体験であった。

この在家者向け短期出家体験コースの参加者（「連友」という美しい呼称がある）の胸には「禁語」の札が留められている。私語を慎しみ、精神集中が途切れないようにして瞑想と念仏に専念する七日間の生活である。何のためにこの佛七に参加しているかを考えれば、雑談に耽る暇は無い。

この模擬出家体験を経て、僧団生活に違和感が無く、また問題も無ければ、勇躍して出家する人が多いと聞く。

佛光緣美術館 ☆

高雄県大樹郷佛光山寺

「星雲八十華誕百家書画賀寿展」を開催していた。

（高雄 佛光山宿舍泊）

九月二八日（木）

五〇四〇 大雄宝殿早課參詣（間衣・輪袈裟着用）

早課次第

宝鼎讚・大悲呪・十小呪・心經・讚仏偈・称誦釈迦聖号・

發願文・三帰依文・善女天呪・章駄讚・供養呪・結齋偈

（『佛光山宗務委員会課誦本』による）

女声がリードする声明。出家の僧尼数百人が唱和する。鳴り物は六種以上が使われていた。大磬・引磬・鈴・鐺・大鐘・鼓・木魚などが用いられる。特別の法要には揺鈴・手鼓・鐺・地鐘などが使われるという。鳴り物は、鐘鼓合敲とか大磬と鐘鼓同敲のように複数のものの合わせ打ちが行われ、声明の響きに奥行きを与える。勤行中に五体投地の礼拝がある。

朝食は星雲大師のお招きを受け、昨夕の中国使節団のメンバーとともに一緒にいただく。

ところで佛光山での挨拶は、「阿彌陀佛」(アミトフオと発音する)であり、僧俗ともに「阿彌陀佛」と言い交わす。通路ですれちがう時も「阿彌陀佛」、作務の人とも「阿彌陀佛」、訪問先でも「阿彌陀佛」、食堂に入る時も「阿彌陀佛」、どんな時も「阿彌陀佛」で間に合う。

佛光山叢林(仏学院) ☆ 学長覺禹法師。 妙聖法師の案内。

女子学生一八〇名、男子学生五〇名が学ぶ寄宿制の仏学院。毎朝八時二〇分に授業が始まる。行門(生活)と解門(教学)とを併せ学ぶ。学生の経歴により、二学年制、三学年制、四学年制のコースがある。外国語教育に力を入れており、我々のところに日本語コースの女子学生二人が話を聞きたいとやって来た。一人はマレーシア出身、もう一人は台湾の人。日本の仏教についてはほとんど知識がない。特に日本の浄土教については何も知らない。

昼食(素食)をいただく。

食後、彼女たちに三十分ほど親鸞について話す。

図書館 ☆ 妙綱法師の案内。

二十六種の大蔵経を所蔵する。龍蔵、鉄眼蔵という珍しい大蔵経。閲覧室の一部は掘炬燵式の座卓で畳敷きとなっている。これは慈恵法師が日本留学中に下宿で勉強していた時、本を広げ資料を並べるのに机の上だけでは狭くて足りず、座卓に向かって座る自分を中心に周りの畳の上

写真削除

に本や資料を並べて置いたところ実に具合良くて、その長所を取り入れたとされる。勉強する学生には好都合の筈ということである。

佛光精舎（老人ホーム）☆ 一九七六年設立。覺方法師の案内。

老人の安らぎと清浄のために開設。六五歳以上の人が八十五人居。最高齢は百五歳。平均七十八歳。入居者のうち四〇人が出家者。出家者の親も多い。入居者は寺の中にいることと僧のそばにすることに安らぎを求める。住むだけでなく修行もしたいと希望する人が多く、その希望もかなえられる。

入居者は自分の体を維持するだけ。費用の負担は無し。将来は、仏陀記念館（建設中）の奥に大規模な老人ホームを建設し、年老いた出家者を収容し、更に一般にも募集したいと言う。

活動協力費として台湾圓で二千五百圓を寄進する。

大慈育幼院（孤兒院）☆

高雄県大樹郷興田路一五三号

一九七〇年開設。蕭碧涼院長。

先生は十人、炊事人三人。

現在は三歳から二十四歳までの六〇人が在籍し、それぞれの学校に通う。大学生九人、修士課程二人が含まれる。

入居児童は、両親とも無いか単親で扶養できない場合と、政府から養

台湾仏教の現状

写真削除

育を依頼された場合の子供たちである。佛光山のネットワークを頼り外国から預けられた子もいる。先生は全員が子供たちと一緒に生活し寝食を共にする。「子供の再生の家庭」となるようグループを編成し、先生が親となり家族のように生活する。一グループは六〜十人。談話室があり、毎週家族会議を行い、その中で問題を整理する能力と発表する能力を伸ばすように努める。

肉親の愛だけではなく、僧の愛、十方衆生の愛がわかるように大切に育て、大きなヴィジョンを与えている。

毎朝五時五〇分に起床し、六時から朝課を仏堂で勤める。

経費は、一学期に二百万圓必要で、寄付で賄われている。

ここは当初から予定していた訪問地であり、活動協力費として日本円で一万円を寄進する。

佛光山寺萬寿園 ☆

高雄県大樹郷興田路一五三号

ターミナルケア施設。依輝法

師。三十五人が就労。

臨終室が六室と遺体安置室が一室ある。月に二、三人がここで臨終を迎える。出家者たちは



写真削除

萬寿園 臨終室



写真削除

萬寿園 遺体安置室

独身であり家族がないから、その臨終のためにこの施設は必要と言う。

臨終室では、臨終を迎える者が兄弟知人朋友などの付き添いで最期の時を過ごす。息を引き取った後は、遺体安置室へ移される。

活動協力費として台湾圓で二千五百圓を寄進する。

ところで、慈恵法師によると、尼僧の中に看護婦出身者が多いわけは、看護婦は病院で生・老・病・死を見る機会が多く、無常を見る体験をして出家する人が多い、と説明された。また、僧侶は六〇歳で退職するが、引退した僧侶のための老人ホーム（六百人収容）を建設中とのことである。更に、台湾仏教会は僧侶専用病院を運営しており、仏教事業への支持や理解は大きくなっていると言う。

写真削除

前田先生 特別講義

編蔵処（大蔵経編修処） ☆ 永進法師の案内と説明。

『佛光大蔵経』の編集室である。編集方針について話を伺う。第二章「メモ 八」と第三章を参照のこと。漢訳経典と大蔵経編集をめぐる熱心な意見交換を行い、長時間の有意義な見学となった。

一六・〇〇 東禅楼にて

前田先生特別講義『仏教の開祖 釈尊のこと』

原始仏典に伝えられる仏伝を題材に取り上げ、釈尊について講義された。先生が生涯をかけて研鑽された学問の成果を集大成された高度な内容の講義となった。聴衆は約二三〇人の仏学院生。相当な学問的知識がなければ理解が難しい高いレベルの講義を、依昱法師の通訳を受けて、女子学生が即座にパソコン入力し中国文で表示するという作業をこなす。講演の終わりに近づく頃には通訳を待たずに入力するようになっていた。高い学力を持つ学生たちが学んでいる。外国出身の学生も多数在籍する。

（高雄 佛光山宿舍泊）

九月二十九日（金）

五・四〇 大雄宝殿早課参詣（間衣・輪袈裟着用）

浄土洞窟（一般参詣者向けの施設） ☆

阿弥陀経と観無量寿経の内容にもとづく極楽世界のパノラマが洞窟の

写真削除

浄土洞窟

中に展開される。極楽世界が地中の洞窟の中にあるという発想は、雲岡・龍門・敦煌の石窟から得たという。仏教美術と彫刻芸術を総合して西方極楽世界の勝境を具体的に現わし、人に浄土往生を勧めるための施設。

佛光聯合問診（診療所）（雲水病院） ☆

院長慧傳法師。妙昇法師の案内。

一九七六年、高雄の寿山寺に小型診療所が開設される。当初はお金のある患者は治療費を払い、無い人は払わなくともよいという方針で運営された。今は佛光山寺の門前に設置され、佛光山全山の健康管理とともに地域診療も行う。医師・看護婦・法師により編成される医療チームを作り、無医村へ派遣するモバイル・クリニック活動を展開する。救急車二〇台。

ボランティア医師の当直制があり、診療所には毎日、医師一人、薬剤師一人、看護婦等五人の計七人の体制で運営されている。彼らはすべて無給のボランティアとされる。診療所には毎日四〇〜七〇人ほどの患者が訪れる。必要経費は月に約四〇万圓。

我々の滞在中に、佛光山の健康診断が行われており、境内にレントゲン車が乗り入れて、その前に大勢の僧尼が列をつくり検診を受けていた。

十三 高雄県老人公寓 菰鶴樓（高雄県立老人ホーム） ☆

高雄県鳳山市平等路一七四号

覺弘法師の案内。

一九九二年、高雄県が設立し、佛光山に経営を委託する。公設民営のホームを財団法人佛光山慈悲社会福利基金会在が経営管理する。

五十五歳以上の健康な人が検査を経て入居する。十二階建て。収容能力は最大で百八〇人であるが、現在は百四〇人が入居する。独身者ばかりでなく、夫婦でも入居できる。

地階から三階までが公共活動区域で、食堂、体育室、娯楽室、事務室、医務室、厨房、仏堂、図書室、文化教室、理美容室などがある。三階には、入居の老親を訪ねて子供たち家族が来た時に一緒に過ごすための孝親套房という部屋が用意されている。

四階以上は入居者の専用の部屋で、一人部屋は六・五坪、一般部屋は七・五坪、特別部屋は十坪の大きさである。各部屋にベッド、調理台、洋服箆笥、姿見、机と椅子、電気スタンド、風呂、緊急呼び出し装置、内線電話、エアコンなどの設備がある。共用設備として、洗濯場、茶の間、談話室、社会活動室、電話、エレベーター、バルコニーなどがある。プライバシー保護のためこの部分の視察はできなかった。十一階と十二階には体の不自由な人が入る。

入居者の費用負担は、入居保証金（十万圓）、部屋代（九五〇〇圓、一六〇〇〇圓）、食費は一人で月に四千圓が必要である。

台湾仏教の現状

写真削除

折しも中秋節の時期で、入居者とボランティアが協同して月餅作りに精を出していた。この月餅は箱詰めにして頒布され、この施設の運営資金になると聞いた。我々も一箱ずついただいた。とても濃厚な味で、本場の月餅はこういう味かと合点した。商品顔負けの出来具合である。

毎朝、搾りたてのジュースが入居者にふるまわれる。

文化教室が開設されており、生け花、歌、体操などを習うことができる。講師は外部から招く。

この老人ホームには、二十四時間、法師が駐在しており、社工士（ソーシャルワーカー）十四人、主任一人、看護人二人のほか、義工隊というボランティアの協力者のグループがあり、活動を支えている。

活動協力費として台湾圓で二千五百圓を寄進する。

十四 佛光山台南禪淨中心 ☆

繁華街の真ん中のビルに所在する。内部は外の喧騒とは無縁で、静かで清潔であった。

昼食（素食）をいただく。佛光山のボランティアの女性が昼食を用意してくださり、海苔巻き寿司と稲荷寿司がメニューの中に入っていた。懐かしい日本食をおいしくいただいた。食事中に給仕に出て来たその方から「お味はどうですか？」と質問があり、「とてもおいしい」と答えると、破顔一笑して満面の笑み。体全体で喜びを表すようであった。細かい配慮をいただいていると感ずる。

写真削除

十五 佛光山台南別院 ☆

佛光山台南禪淨中心の立地が繁華街の真ん中で手狭でもあるため、台南市役所近くに新しく別院を建設中である。広大な建物は殿堂のようで、これまでの佛光山の建物とは異なる意匠である。外壁には五仏をあしらったパネルが覆いのように装着されて洗練されたデザインである。内部正面は大きな釈迦仏が台座の上に安置され、その後ろの壁つまり正面の壁には金剛般若波羅蜜経が刻字されており、裏から電光があてられた経文の文字が浮かび上がるようになっていいる。このような斬新な経文ディスプレイは見たことがない。日本のお寺でこのように所依の経典を電光で浮かび上がるように本堂内に展示装飾したら、反応はどうであろうか。

我々は仏教経典すなわち漢訳経典を無条件に尊いものとしているが、漢文を音読してそのまま理解できるような日本人は少ない。普通の人であれば、返り点を打ちながら漸く読める程度であろう。漢文は今でも外国語である。漢字ばかりで書かれたお経に接する時、内容を理解する前に、そこには尊いことが書かれているという思い込みが既にある。漢字で書かれたお経であれば尊いものと思う。これも文化である。漢字文化の奥は深い。台湾人（あるいは中国人）にとって漢字表記の文章はどのように写っているのだろうかと思案した。

十六 台南孔子廟

台南市南門路二号

孔廟とも文廟とも先師廟ともいい、中国の伝統文化の文教の中心であることを象徴する施設とされる。この孔子廟は、永暦十九年（一六六五）、陳永華の建議により建てられ、台湾で最も古く最も歴史的意義をもつものとされる。国学を興し学問に精励する人格者を招聘して、台湾への中国文化の定着に貢献した。東大成坊（東側の大門）に掲げられている「全臺首學」の額はこの事情を物語る。

また主殿の大成殿には、清朝の初代からの歴代皇帝と民国総統の筆による扁額が掲げられている。康熙帝「萬世師表」、蒋介石総統「有教無類」の扁額は孔子を比類無き教育者と讃えるものである。殿内には、至聖先師孔子の神位牌を祀り、左右両側に十二哲人と先賢先儒の神位牌を祀る。その中に、先儒許慎や先儒諸葛亮の神位牌があり、彼らの中国文化における位置を知る。

東大成坊の右側には下馬碑があり、漢字と満洲文字でそれぞれ「文武官員軍民人等至此下馬」と刻されている。

九月二十八日は孔子の命日である。そのため台湾ではこの日は「先生の日」とされているそうで、台南孔子廟では、ちょうど「孔廟文化節」が開催されていた。庭では中国楽曲が演奏されていた。

台南市文廟管理委員会が管理している。

中国文化は漢字文化である。中国仏教の伝統もそれに則っている。文



台南孔子廟 至聖先師孔子の神位牌



台南孔子廟 先儒の神位牌

字は即ち漢字であり、漢字で営まれる文化こそ中国文化である。中国文化の内容は儒教に裏付けられた教養であり生活であろう。漢字は儒教の教えを伝えるメディアでもあった。中国において禪宗が不立文字を主張したのは、こうした儒教と漢字との関係を踏まえたもので、漢字の役割の主要な部分を嫌ったものとは言えまいか。以心伝心とはいえ、とくに阿耨多羅三藐三菩提に関する意志（あるいは心境）の伝達について、言語表現と漢字表記とは区別して考えてもよいのではないか。仏教精神からばかりで説明できるものではなかうと思案する。

十七 弥陀寺

台南市東門路

住持圓斌法師。明末萬曆年間創建。阿弥陀仏を奉祀する台湾第一所寺院とされる古刹。日本支配時代と戦後は衰退したが、圓斌法師が住持してから法輪常転・慧光普照となり、宏法利生の道場となった。一九八〇年までに唐朝の宮殿様式を採り入れた伽藍が新築されて、境内は一新された。伽藍完成以降、圓斌法師は菩薩の大願を発し、人生仏教を提唱している。民衆引接のために、定期的に経を講じ、共修の法会を開き、貧困者を救済し、家庭問題のカウンセリングも行う。人心を善に向かわせ、人間の素質を高め、正しい信仰へ民衆を導こうと活動しているという。山門には左右に一對の金剛護法菩薩が武官の服飾で眉を上げて目を怒らせ威厳をもって立つ。境内に入ると、門から左右に三階建ての東廂と

西廂が巡らされて正殿と後殿に接続する。東廂一階は民衆閲覧室、西廂一階は服務所で信者の要請に対応し、困り事の相談にも応ずる。二階は寺衆の寮房、三階はバルコニーで読書に最適の場所である。

正殿の一階は大雄宝殿である。中央に教主である本師釈迦牟尼仏、左に文殊菩薩、右に普賢菩薩という華嚴三聖を安置する。二階は西方三聖宝殿で、中央に阿弥陀仏と觀世音菩薩・大勢至菩薩、左右両脇に十六羅漢を配置する。三階は清朝期の古宝の陳列館である。

奥の後殿の一階は地藏殿で、正面に大願地藏王菩薩、東側に歷代住持、西側に寺衆と信者の往生の位牌を安置する。二階は図書室と藏経楼、三階は圓通宝殿で、台湾最大の千手千眼觀世音菩薩（木彫）を安置する。

毎日の早課は四・三〇～五・三〇、晚課は十九・三〇～二〇・三〇

通年の活動は（農曆）

長年消災燃燈は毎月八日と二十三日 十九・三〇～二一・三〇

法師講経は毎月五・十日と二十日・二十五日

十九・三〇～二一・三〇

梵唄教唱と静座は毎月一・三日、十一日・十三日、十五日・十八日、

二十六日・二十八日 二〇・三〇～二一・三〇

誦経拝願は毎月十四日と三十日（月が短ければ二十九日）

十九・三〇～二一・三〇

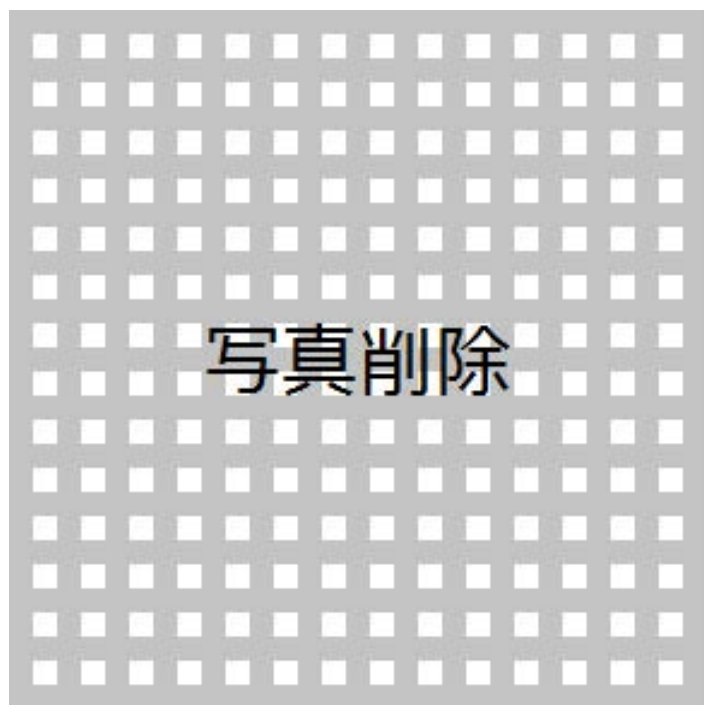
法師賜教は毎週平日

特別の法会は（農曆）

九・〇〇～一二・〇〇



弥陀寺 大雄宝殿



弥陀寺 千手千眼観世音菩薩

新春法会礼拝三千仏懺

一月一日～五日

弥勒菩薩聖誕

供仏齋天

一月 九日

観音法会

二月十九日

観音菩薩聖誕

六月十九日

〃 成道

九月十九日

〃 出家

仏教教主聖誕法会

四月 八日

浴仏法会（終日）

孟蘭盆齋僧共修法会

七月二日～十六日

地藏王菩薩聖誕法会

七月二十三日～二十九日

薬師如来聖誕法会

九月二十三日～二十九日

弥陀仏七法会

十一月十一日～十七日

阿弥陀仏聖誕

釈迦如来成道紀念日

十二月八日

仏菩薩の聖誕法会には帰依儀式が合わせて執り行なわれる。

十八 竹溪禪寺

台南市体育路八七号

永曆十五年創建の古刹。

夕時勤行が営まれていた。行道が行われており、誘われて参加した。

在俗者を大らかに受け入れる雰囲気がある。

通年の活動は（農曆）

新春礼拝万仏

一月一日～九日

弥勒菩薩聖誕

観音法会

二月十九日

観音菩薩聖誕

台湾仏教の現状

祖師紀念日

三月四日～三月十日

仏七

浴仏節

四月 八日

仏教教主聖誕法会

観音法会

六月十九日

観音菩薩成道

孟蘭盆勝会

七月一日～十九日

観音薬師消災法会

九月十五日～十九日

住衆往生追思法会

十月九日～十五日

仏七

開塔祭祀

十一月九日～十五日

礼拝梁皇宝懺

毎月（農曆）一日

共修会

薬師経誦経

〃

十五日

共修会

三昧水懺誦経

〃

一日～七日

共修会

妙法蓮華経誦経

四月十六日～六月二十九日

共修会

華嚴経誦経

台湾滞在の最後の夜にあたり、依昱法師から晚餐へのご招待をいただく。ご好意を有り難くお受けして、会場の人道ホテル一階のレストランへ入る。驚いたことに、ここは素食専門のレストランであり、百種類に及ぶ素食料理のバイキング方式であった。大勢の客で満席である。奥の部屋では宴会が開かれているようで、たいへんな賑わいである。このレストランの素食の料理を見て、素食という菜食は、決して精進潔斎した禅堂の精進料理に限った禁欲的なものではないことが実際にわかった。素食料理として供されるものは、色、形、食感、味付けなどを肉や魚に



竹溪禅寺 大雄宝殿



竹溪禅寺 夕時勤行の行道の様子

似せたもので、日本で見慣れたコピー食品顔負けの料理である。驚くほど本物に似せてある。支配人が「向こうにお肉がありますよ」と耳元で囁く。「素食に肉料理とは面妖な」と思いつつ、行って皿に取れば、どこから見ても肉料理である。だが、食べると材料は肉ではない。日本のコピー食品を凌駕する工夫と技術である。ここまで似せる必要があるのだろうか。

執着を離れるべく修行する僧侶にとっては、これらの料理（あるいはその技術）はかえって邪魔になるのではあるまいかと案ずる。食の楽しみに囚われれば食欲の虜となりやすい。素食の調理技術はどういう経路を経てこのようなところまで発達したのだろうか。その発達を促すエネルギ―はどこから湧くのか。繁盛ぶりが目立つ市井の素食であるが、そこには僧院の精進料理とは別の原理があるように思う。

依昱法師のご好意により、高雄きっての高級ホテルに破格の値段で宿泊できることとなった。超高層ビルの五十八階の部屋から、有名な高雄の夜景を楽しむように勧められたが、疲れのため見ることなく就寝した。

（高雄 金典酒店泊）

九月三〇日（土）

十九 高雄意誠堂（慈惠堂）

高雄市苓雅区三多四路六十六号

神壇には文衡聖帝・孚佑帝君・諸葛武侯の三恩主を祀る。二十世紀初

台湾仏教の現状

め神壇を設け文衡聖帝を奉祀して扶鸞を行っていたものが発展した。

誠品書店で資料収集

依昱法師の見送りを受け、名残りを惜しみつつ空港で分かれる。昼食にとお弁当（素食）の差し入れをいただく。

高雄 一四・二〇発 C I 一九六（中華航空）

台北 一五・一五着

台北 一六・二〇発 C I 一五〇（中華航空）

中部 二〇・〇五着

帰国後ほどなくして、依昱法師からメッセージが届いた。

「以融和の心胸、尊重異己他人、以融和の氣度、包容各種信仰、以融和の雅量、超越種族藩籬、以融和の懷抱、溝通全球人類。

敬祝 吉祥如意」

氣宇はまことに壮大にして心に響くものがある。学ぶべきは学ぶの姿勢で、時間をかけ、交流を積み重ねる必要があるだろう。



佛光山叢林（仏学院）の皆さんと



街頭風景 檳榔椰子の実を加工する女性

執筆者紹介

小山 正文

(同朋大学大学院非常勤講師 研究所顧問)

塩谷 菊美

(神奈川県立茅ヶ崎高校教諭)

武田 龍

(客員所員)

青木 馨

(同朋大学非常勤講師 客員所員)

安藤 弥

(同朋大学専任講師 所員)

高橋 良政

(日本大学法学部教授)

嘉木揚 凱朝

(中国社会科学院世界宗教研究所研究員 客員所員)

Gyana Ratna Sraman

(愛知学院大学非常勤講師 客員研究員)

同朋大学佛教文化研究所紀要 第二十六号

平成十九年三月二十五日 印刷

平成十九年三月三十日 発行

名古屋市中村区稲葉地町七―一
編者 同朋大学佛教文化研究所

所長 小島惠昭

電話 〇五二―四一―一三七三

発行所 同朋大学佛教文化研究所
印刷所 株式会社 一誠社